

『花の在処』

さくら なおき

湯田上温泉で知られる県央の田上町に新潟県景勝百選にも選ばれた護摩堂山（標高二七四m）がある。

四月最初の日曜日、克彦は幼なじみの松浦悠子に誘われ、小学校の遠足以来久しぶりにこの山に向かった。二十五歳の二人とともに大学は出たものの現在フリーターである。

「意欲が無いわけではない。自分の行く道が見えないだけ」ふたりの意見は一致する。

この日悠子が誘ったのには理由があった。「最近の若者は歩かなくなった。若いうちにもっと足を使え」と記されたインターネットの美容コーナーに触発されたのだ。

「単純だなあ、すぐ乗せられるんだから」気楽に出かけた二人。だが、これが、あの事件に巻き込まれるスタートとなった。

登山口はすでに混雑していた。

◇

道幅のゆったりとした上り坂を二人並んで他の登山客のペースに合わせながら歩いた。右手の竹林を過ぎると杉木立となり、さらに進むとコナラ、ケヤキ、様々な雑木が山道を包み、小鳥のさえずりが山の風情を醸し出す。ときおり顔にかかる朝陽が初夏の陽射しのように結構暑い。ゆるい坂であるが、上るに連れ克彦の幅広い背中が汗ばんできた。身に着けている長袖のアンダーシャツが煩わしい。

「山は少し寒いかと思つて」

「ダメねえ、今日から四月よ。今朝の天気予報聞いてなかったの？ この春最高の気温だつて」

悠子も似た柄の半そでシャツに脚線美のはっきりした薄手のパンツをはいていた。「だって、起きたときは曇っていたから」

「先を読まない」と

「先が読めるくらいならフリーターなんかやっつてない」

「屁理屈言っちゃって」

暇さえあればインターネットに熱中している克彦、山登りは行動範囲外である。分かったような口を聞く悠子にしても五十歩百歩だ。

切り通しの赤土色した所々に、樹の根が生きているぞと言わんばかりに荒々しく四方に張り出している。

「すごいな、この生命力。俺たちに見せつけているようだぜ」

「私たちだって頑張っているじゃない。収入も無いのにさ」

あっけらかんという悠子。口は悪いが色白で黒目がちの大きな瞳が愛くるしい。

十分ほど歩くと、頂上まで二百メートルと記された道しるべ付近で、道は二股に分かれた。T字形の看板には左側にあじさ

い園・西側遊歩道、右側に東側遊歩道とある。地図を眺めていると声がかかった。

「左の道を行くと石切り場だった岩壁や越の彼岸桜が見れるよ」

たまたま居合わせた年配の男性がそう教えてくれた。二人が山に不案内と察したようだ。これが杉浦重蔵との出会いだった。

彼は、史跡案内のボランティアをしており、年齢は不詳と笑った。少なくとも五十歳は超えているだろう。人懐っこい顔がお笑いなタレントの誰かに似ていると思ったが名前が浮かんでこない。話好きと見えてすっかりその相手にされてしまった。

彼のことにばに従い左の道を行くと、右手奥にそそり立つ岩肌が現れた。その反対側に彼岸桜の老木が立っていた。

「あそこの岩場で作業していた石切り工たちが、この桜樹を眺めながら疲れた身体と心を癒していたんだろうな」

揃いの薄茶色の作業服で樹木を調べてい

るらしい男たちに視線を移しながら杉浦は
そう説明した。そこを通り過ぎ、ほどよい
疲れを感じながら頂上に着くと、急に光が
差したかのように、パノラマ状の広大な蒲
原平野が目飛び込んできた。

「オオッー、すげえー」

「ウワー」

二人とも、こんな胸のすく瞬間と気持ち
のいい汗をかいたのは久しぶりだった。

先ほどらい同行してきた杉浦は、目を遠
くへ向けていた。

「ほう、佐渡島がはっきり見えますなあ」

角田山の右に青緑の輪郭が浮かび上がっ
て見えている。

「まだ、ご一緒してていいかな？」

良いも悪いも、もうずっとくっついてい
るじゃないですか、と克彦は口に出しそう
になった。

杉浦は腰を落ち着けると、あじさい園の、
梅雨時になれば賑わいを見せる三万株もの

紫陽花の彩りの素晴らしさを語り、その説
明が一段落すると、

「そもそも護摩堂山の名前は弘法大師が
：」と歴史の一端を話し出した。

堅苦しい話を、と思っていたところ意外
だった。仕事柄なのか、ゆったりとした歯
切れのいい話し方は退屈させなかった。

興味を示し始めた二人に気を良くしたの
か、この山の「団九郎伝説」を語りだした。
狐が青年に化けて、女房の出産のため川下
に住む産婆さんを洞窟まで背負ってきて無
事出産させた。そのときお札に産婆さんに
短刀を渡した。その短刀は今でも産婆さん
の子孫が保管しているらしい。また、この
伝説の元は、村松藩士の娘が不義理をして、
ここの洞窟でお産をしたという話だとも語
った。そして話題は幕末動乱の時代にまで
及び、明治維新直前の崩れ行く時代の軋み
の中、新政府軍に対する奥羽越列藩同盟を
結んだ各藩の、それを乗り切ろうと苦悩に

揺れ動く様をスクリーンに映し出すかのよう
に話す。どうも幕末物の方が好きらしく
益々熱が入ってくる。

「加茂だったね、住まいは：小京都の趣き、
加茂川のせせらぎに伝統工芸は桐細工」

まるでナレーションを聞いているようだ。
「加茂はね、あの北越戦争で長岡城を落と
された河井継之助ら奥羽越列藩同盟軍が奪
還を期して軍議を凶った土地なんだ。本陣
にしたのは青海神社の近くだけどね。それ
に同盟軍の米沢藩がその近くのお寺を本陣
とした。河井継之助の率いる隊が、ここか
ら、盛り返し長岡城を奪還したわけだけど、
結局は負けて八十里越えをして会津に向か
った。敗因は新政府軍の新潟の太夫浜上陸
や、新発田藩や村松藩を味方に引き留めて
おくことが出来なかった、いや同盟軍にと
っては彼らに裏切られたということかな」
「そんな戦争の舞台に加茂が出てくるん
だ」

克彦は、杉浦の話術に引き込まれていた。
「昔の人は大変ねえ、長岡からこんなとこ
ろまでみんな歩いて来るんだから。それ
も手ぶらじゃないんだものね」

「そう言いながら、悠子は均整のとれた脚
を組みなおす。」

「信濃川を船で下るってこともあるよ。だ
が、人目に付きすぎる。歩きが一番だな」

杉浦ががつけ加えた。その後、杉浦の話
は、段々と講談調になり、そして、『隠し財
宝』の話へと展開した。

「新発田藩や村松藩と共に薩長連合軍と戦
うことを想定し、軍資金を護摩堂城跡の洞
窟に備蓄保管していたというのだ。いわば
新発田や村松藩などに対する工作資金だね。
その使命を託されたのは長岡藩の青年藩士
ら総員七名だった」

「洞窟について、ここにそんなのあったかし
ら」

「そういえば途中にあったみたいだ」

克彦は空壕と書かれた標識を思い出した。
「十六世紀ごろ、この城を拠点として戦
いが行われているから、防御上設けたんだ
ろうなあ」

杉浦は、護摩堂城の沿革をつけ加えなが
ら話し続けた。

「だが、さつきも触れたように、新発田藩
や村松藩が列藩同盟を離脱すれば、長岡藩
は窮地に立たされてしまう。両藩の藩論を
佐幕で固めさせるにあたり、万一の場合で
も、いったん下田村に引き返し吉ヶ平から
会津に退きそこで同盟軍を集結して再起を
図る。わが藩が準備した軍資金で新式の銃
や大砲を揃えることができる。そう主張す
れば、悲観論を唱えている藩内の空気を一
気に、打倒新政府軍としてまとめ得るだろ
う、そういう戦略を両藩の佐幕推進者に
伝え何とか引き留めておこうとしてきた。
しかし、風は長岡に吹かなかつた。新政府
軍に恭順する勢力に新発田藩内は包囲され

た。同じく村松藩も新政府軍側へと旗手を
鮮明にした。その工作を任されていた青年
藩士は最終的に、軍資金を携えては長岡や
会津まで行けないと判断。両藩には内密に、
予定通り洞窟の入り口を閉ざして下田へと
退避した」

「七名の青年藩士って幾つくらい？」

「君たちと同じくらいだろう」

「俺たちの歳、知ってるの」

「そりゃあ、服装や顔を見れば分かるさ」

「その人たちは、その後どうなったんです
か」

「遅かれ早かれ咲いた花は散るもの。多少
の時間差はあったが、みんな戦死した。妻
や家族、幼いわが子を残して。藩のため、
家族のためと、自分の信念を貫いて散って
逝った」

と言ったきり杉浦のことばが途切れた。

「信念を貫いて散った。そんなものかな
あ」克彦は自分の現状と比較した。

「みんな強烈な目標を抱いていたんだよ」
数秒間の沈黙の後、杉浦はまた続ける。

「その七名とは違うが、長岡藩士の中では、
西南戦争のとき、憎し薩摩とばかり志願し
た者もいて、北越戦争では生き残ったが西
南戦争で命を落としたり：、まあ動乱の時
代はこんなものかも知れないがねえ」

克彦も悠子も近くで育った割には町の歴
史に無頓着だったため、杉浦の話は実に新
鮮に響いた。それにしても中々の聞かせ上
手だ。

「ざっと、こういう言い伝えなんだが、ど
う結構おもしろいでしょう物語としては。
歴史ロマンだね。隠し資金なんて本当にあ
ったのかどうかは別として、もしかして、
という人間心理に働きかけてくる」

克彦たちの真剣な表情を見て楽しそうに
白い歯を見せた。

「こういう話に興味があったら、このホー
ムページを見るといいよ」とアドレスの記

されたメモを差し出した。そして、「じゃあ、
お先に」と笑顔を残して、今度はさつさと
ひとりで下り始めた。

通る声のせいか、話す内容が人を引き寄
せるのか、頂上に居た登山客もひとかたま
りとなって耳を傾けていたのである。

「サムライがこの近くを歩いていたと思う
と不思議な：」

下りながら克彦が言いかけたとき、上り
で眺めた彼岸桜のところがなにやら騒がし
い様子。一足先に下りた杉浦重蔵もその傍
で立ち止まっていた。

「おい、チョット見てくれ」

上ってくるときに見かけた薄茶色の作業
服を着た男が、同じ服装をした作業員に大
きな声をかけた。

「ほら、こっちだ、こっち」

急かせるように手招きしている。

中年の男二人が、手にした工具を木の下
に置くと声の方へ歩み寄った。やや緊張し

た雰囲気と声につられ克彦たちも、見聞き出来る距離まで近づいていった。上り下りする登山客で周辺に人だかりが出来た。桜樹は頭上で太い幹が二股に分岐している。風雪に苦しみ耐えてきたのだろう、暗灰褐色の荒々しい肌が歳月をものがたっていた。

「ここんとところに、何かが詰まってるんだ」

脚立の上で中年の男が指差した。二股に分かれた付け根が深くえぐられていると言う。呼ばれた二人がその部分に視線を向けた。細いきりのようなものを動かしながら、何かを取り出そうとしている。

「なんだこりゃ」

やがて直径二センチほどの短い棒を引っ張り出した。桜の小枝のよう見えた。

「竹筒だな」

下りてきた男は、二十センチほどのその棒を集まった人たちに見えるようにかざした。

そして、この加茂・田上地区周辺で見か

ける黒竹のようだ、とその男はつぶやいた。「ううん？」

竹筒の先端あたりをこすっていたが何かに気づいた。そして繊維状のものを引っ張り出しそれを指で広げている。竹筒から、油紙で包まれた物が出てきた。

ほどこいてみると変色して読みづらいが毛筆で書かれた文書らしい。

「子供のいたずらじゃないのか」

「子供なら今どき筆は使わんだろう。誰かが拾って差し込んだか」

「タイムカプセルかな」

三人の大きな声で言い合う様子が周辺にますます人だかりを築いた。克彦と悠子はその最前列で見守っていた。

「なんて書いてあるんだ？」

作業員たちは首をかしげている。

「あんたら、これ読めるかい？」

手にした男が、分厚い指で周りの人に開いて見せ、杉浦と目が合うとそれを渡した。

「うーん、これは古文書のような。毛筆で書かれているところをみると百年は：百年以上は経っているんじゃないのかな」

杉浦が強調するように、百年を連発した。すると、作業員三人が、一様に「ほう、それはまた凄いなあ」と相槌を打っている。見物人からも驚きの声が聞こえた。

「としごとに咲くや：桜かな。ところどころの一字ずつは分かるけど、最後に人の名前が、ウエキシヨウウウと読めそうだが、全体に何が書かれているかはちよつと：」

漢字とひらがなが入り混じっている。漢字は、「桜」、「花」そしてひらがなは、「と」や「に」、「を」などと読めそうだが、全文としては、杉浦にも判読できないらしい。町から依頼されて、樹勢の調査をしていると言っていた男は、

「役場で調べてもらうしかないな」と集まった人たちを見まわすようにしながら大きな声で言うと竹筒と一緒に作業袋にしまっ

た。

その夜、克彦は杉浦から示されたホームページを開いた。今日、発見されたあの古文書についても詳細に記載されており、インターネット・ニュースにも載っていた。悠子も見たらしくメールで知らせてきた。

◇

翌々日、同じ話をテレビのワイドショーが話題の採りたて情報コーナーで報じた。インターネットのサイトを出所に、桜樹から取り出された書き物は作業員によって現場に届けられ、すぐに専門家による鑑定作業が行われたとスタジオの司会者が話している。

「護摩堂山は今日も登山客で賑わっています。頂上まで二百メートルほどの場所に立つこの彼岸桜が問題の老樹です」

テレビでは女性アナウンサーが現場から実況で伝えていた。

「発見者は町の委託で花の咲き具合や幹の状態を調べていたのです。弱っている場合は、生命維持のため、腐りかけた枝幹に防腐剤を注入する必要があります、そのため作業をやっていました。そのとき、幹の割れ目の中から思わぬものを見つけました。それは、直径二cm、長さ二十cmほどの小枝状の竹筒でした。これだけではなんの変哲もないのですが、驚いたことにその中から、油紙で包んだ毛筆の文書が出てきました。うす茶色に変色しているその紙には、専門家による鑑定の結果、つぎのように書かれています。

常在戦場

添へ文 としごとに 咲くや吉野の桜花

樹を割りてみよ 花の在処を

植木翔悠

画面には、解説文書が映し出された。

「この歌は、とんちの一休さんでお馴染みの一休禅師が詠んだものと見られています。

ところで、文書は、紙質、文字の墨、これを入れた黒竹の状態などから、百年以上は経っており、署名者は常在戦場の文言から、越後長岡藩ゆかりの人物と推測されています」

新たに『常在戦場』と『添へ文』の文字が判読されたということだった。

「植木翔悠とありますが、この人物はどんな人なのでしょうか」

司会者がコメンテーターに尋ねている。

克彦はこの『常在戦場』をキーワードにネット調査を進めた。インターネット好きが思わぬところで役立った。

常在戦場とは三河の牧野家の気風を表わ

していることばだ。牧野家といえれば後年、長岡藩を治めた家系であることから、長岡藩士の精神を表わしたものと見える。とすると、植木翔悠とは長岡藩に関係した者と考えるのは正解のようだ。

テレビではコメンテーターが独自の見解

を述べ合っていた。

「花の在処、とは藩の軍資金のことか」

「ならば桜樹と何か関係があるのか」

「軍資金は長岡藩とつながるどこかに隠されたのでは」

隠された軍資金があるとの肯定的な口ぶりで、複数のコメンテーターがそう解説していた。一休禅師の逸話からきているらしいその文言をめぐって、スタジオでやりとりが行われている。その中で、何のために桜樹に差し入れておいたのか、護摩堂山と長岡藩とはどんな関係があるのか、添へ文と記されているからには、他にまだ文書があるのでは、など様々な意見が飛び交った。河井継之助や長岡藩士が会津に逃れる際、八十里越え道中のどこかに軍資金を隠したという噂や、護摩堂山の空壕のどこかに隠した、とのコメントも飛び出した。

画面が護摩堂山を映し出した。アナウンサーが言うように、かなりの人が上り下り

している。

◇

「この古歌と杉浦さんが語っていた伝説が近づいていくようだぜ」

「とんちの一休さんの歌を模しているのは、何かを問いかけているんじゃないの」

「たぶん：」

克彦は、喫茶店で悠子と話し合っていた。いつものゲームのワクワク感とは異なる興奮をおぼえた。しかし、こういう知的ゲームは二人にとって始めての経験。話もついあちこちに飛んでしまう。

克彦は隠し資金の話にも興味があった。

「歴史館の資料にも書いてあったけど、千両箱って結構重くて、脇に抱えて飛び歩くとて事はまず無理だつて。まして山道はね。十五キロくらいあるらしいよ」

「そうでしょうね、私も調べてみた。天保小判や万延小判なら恐らくそんなもんでしよう。幕末頃の千両箱としたら、万延小判

だと思ふけど、敵の目に触れずにこれだけ重いものを背負って峠を越えられるかしら。隠すとしたら、もっと身近かな場所じゃないのかな」

「いずれにしても、あの古文書の文句だよな。そこに何が隠されているのか」

「花の在処か。なにしろ私たち発見時そこに居たんだから。あの古歌の意味、それに何で樹の中に入れて置いたのか、何のために：歴史ミステリーよね」

好奇心にかられた悠子は大きな瞳を克彦に向ける。

克彦は新潟県道路地図を開いた。

「田上は新発田を探る際、長岡藩にとって距離的にも地勢的にも格好の位置にある」

新発田・長岡間を直線で結ぶと、加茂田上周辺はほぼ中間点にあった。村松へはもつと加茂よりの道からだどって行ける。新発田も村松も地図の上では会津からの侵入を遮断する位置に見えた。

「最初に長岡城が落城したとき、加茂まで退却したって杉浦さんが言ってたけど、そのときはどの道を通ったのかしら」

「幹道は人目につくから難しいだろうし、東側の山道をたどって下田方面から入ってきたんじゃないのか。道なき道、けもの道を」

「大変だったでしょうねえ。下田から会津方面に逃げた女の人やお年寄り、それに小さな子供もいたでしょうに」

「新発田藩などの工作に失敗したことが引き金としたら、青年藩士たちは辛かったろうな。女子供にまで苦しみの逃避行をさせたくわけだから。命懸け、とことばでは気安く言うけれど、昔はほんとに命を懸けていたんだよな」

克彦は、杉浦の話した青年藩士と植木翔悠を重ね合わせていた。

溶けた氷でコップに残ったアイスコーヒが薄茶色になっているのも構わず、二人

とも話しに夢中になっていた。

しかし、意気込みとは裏腹に現実のギャップは縮まらない。

「百年から二百年くらいまで遡って、『植木翔悠』の名を探しているが、これがなかなかわからねえんだ」

克彦は、インターネットで検索したり、人物事典で探している状況を説明した。

「有名人ではなく、単なる一般の人じゃない」

悠子が首をひねりながら言った。

「俳人・歌人にも見当たらないし：書家も調べたがダメだった」

克彦は疲れたのか、両足を伸ばし背もたれに精一杯寄りかかった。

「石切り工が酔っ払って入れたのかも」

「杉浦さんのような人が身近にいたら：面白かったよな。俺、興味が湧いてきたんだ、こういうの」

悠子は克彦の意外な一面を見た気がした。

◇

「週刊話題」社が、特集として日本全国から集めた七つの話題でページを割いていた。そのひとつに『護摩堂山秘話』があった。

「面白い記事が載ってるぞ」

克彦はいつもの喫茶店に悠子呼び出し、指を震わせながら雑誌を開いて見せた。

：その昔、越後長岡藩の上級藩士の側室が双子の姫を出産した。二人の成長を願い、山岳信仰の山でもあった護摩堂山にその子を捨てたことに。もっともこれは一種の儀式であり本当に捨てるわけではない。部下の藩士を経由し、護摩堂山周辺にある二つの家が拾い役の養家として選ばれた。

ところが、次第に暗雲が嵐となる時代にさしかかり、引き取るタイミングを見出せずに、二人はそれぞれの養親の下で成長する。その後、一人は村松藩の、今ひとり生誕の地・長岡藩の家臣へと嫁いでいった。

両藩とも当初同じ奥羽北越列藩同盟を結んだ同志だった。運命の悪戯か、同盟軍の一藩である村松藩が右往左往の末新政府軍側についてたため、長岡藩とは敵味方に分かれ戦う関係となった。二人の姫は夫を介してあい争う立場に立ったのである。結果、新政府軍に組した村松藩は生き残り、長岡藩は破れ会津へと進む。そんな二人だが、それぞれ幼な子を抱えながら戦乱の世を必死で生きた。

話は前後するが、長岡藩は時代の風をどう読み取るか周辺の藩情勢を探っていた。そのリーダーが今回名前があがった植木翔悠である。彼は新発田と長岡の中継拠点として、田上護摩堂山の桜樹を選び、探った情報を竹筒に入れ桜樹に差し込むことにした。竹筒は別の藩士が取り出し長岡に運ぶ。逆もある。時間的に合理的であり疑心暗鬼の時代、一人が長岡間を往復するよりはるかに安全であった。あの桜樹が情報を受発

信するポストであり、リレーの継点となっていたのだ。恐らく石切り工に交じってこの作業を行ったのだろう。その最後の情報が戦況の変化でそのままとなって今日に至った。だが、疑問は解けない。彼がああ言に何を託したのかが。今後も小誌は続けて解明作業にあたることにした。

「長岡と村松藩士の奥さんが双子の姫様？ ホントかな。それにあの桜樹が情報ポストに使われていた？ 面白い発想だけど…」
「うーん、姫様のことは：何しろ百四十年も昔のことだからね。植木翔悠と竹筒の記事はひとつの推理としては面白いな」
ただこの週刊誌は、売らんがため面白可笑しく記事を作り上げることでは有名な雑誌社だ。
「まあ、この記事も参考にするとして、一連のニュースを整理してみると、あの文書がなぜ桜樹にあったのか、何かの情報伝達

の意味があるのか、そして巷を賑わしている
隠し軍資金が存在するのかどうか、の三
点だと考えてるんだけど」

「じゃあまず、なぜ桜樹に？」

「合理的な情報の伝達からすれば、リレー
の継点にしたことは頷ける。頂上のあじさ
い園側から高立山、菩提寺山方面に抜け道
がある」

「ということは、山道を通ったら人目につ
かず意外と早く新発田へ行ける？」

「そう」

「二番目の、あの古文書の意味は？」

「あれは、『時期が来なければ』や、『無い
ようでも有る』という意味にもとれる。工
作を成功させる時期か隠し資金のことか」

「その隠し資金はどなの？」

「戦に勝つには新政府軍にもない強力な武
器を持つこと。それが、一分間に二百発も
連続で打てるガトリング砲だ。長岡藩はこ
れを持っていた。一門五千両として、これ

を装備するための資金提供の用意がある、
と両藩に持ちかける」

「それを味方に引き寄せる説得材料にした
ってこと？」

「大義とは別に、勝てる戦かどうかも重要
な判断基準だった。今も昔も金は要る」

「克彦、勉強したね。このくらい頑張れば
フリーターも卒業できるのに」

悠子のことばに反論もせず克彦は冷めた
コーヒーカーップを手にする。BGMが静か
に漂う店内。学生らしいカップルが幾組か
談笑している姿をぼんやりと眺めながら、
この二十五年の人生で、初めて見えない先
を読み取ろうと、必死にもがいている自分
を見つめていた。

◇

その夜帰宅してパソコンを前に克彦は、
「お気に入り」に保管したインターネット
のあのサイトを開けた。そこには、克彦の
全身から力が抜けるようなコメントが掲載

されていた。

◇

「古文書発見の話題は、思った以上に反響がありましたこと関係者に厚く御礼申し上げます。毎日のように、人が人を殺める、ことに親が子を殺し、子が親を殺す。子供を指導する教師が破廉恥な行動をする。人を守るべき警察官が犯罪を犯す。これらを繰り返し報道するマスメディアは、世間はそんなのかと読者、視聴者らに錯覚を起させている。こうした昨今の暗いニュースばかりが目や耳に届く中で、少しは清涼剤になったものと喜んでおります。人の口は一番の広告宣伝ということを身をもって感じた次第です。同時にインターネット恐るべし、です。あつという間に全国に伝わってしまいましたね。この世の中には、「在るようで無い、無いようで在る」ことが有るということですよ。歴史ミステリーとして少しは面白がった人、真相究明に頭を悩ませ

た人、コメンテーターとして登場したバツの悪い人、これらを取り上げた一部マスコミ関係者等々大変お騒がせ致しました。そして町役場の方どうぞご容赦を。

さてさて、今年のエイプリル・フルはこれでお開きとなります。お楽しみ頂きましたこと大変ありがとうございます。最初はある青年をターゲットに考えたのですが：。あの竹筒と筆文字の文書、結構苦労したんですよ。そうそう、あの老樹での作業者らしき三人も実は私と共犯であります。

咲いた咲いたに　　つい浮かされて

花を尋ねて西また東

わらじ切らして　戻ってみれば

家じゃ梅が笑ってる

それではまた来年まで、

ご機嫌よう

S・J

◇

乗せられた。それも見事に。怒りの気持ちを乗り越えて笑いたくなった。言われて

みれば、四月の第一日曜は1日、四月馬鹿の日だった。事件を目撃した日に、すでにインターネットに載っていたのも時間的に不自然である。それにしても、越の彼岸桜への杉浦の巧みな誘導は実に乗り心地が良かった。

克彦はそうメールを悠子に送った。

◇

その後町役場では、こうした文書が送られてきたのは事実だが、真贋の解明はしておらずコメントのしようがない、また「杉浦重蔵」なる人物はその存在も知らず、もちろん町から史跡案内人に依頼したこともない。また、桜の樹勢調査なども行っていない。誠に遺憾と応えた。またテレビは、局に通報された「インターネットに掲載されている」との情報に踊らされてしまった、裏を取らず軽はずみだったとのみ報じた。そのテレビに出演したコメンテーターは、こういった歴史の裏話は無きにしもあらず、

と誰ひとり自分の発言は取り消していない。週刊話題社に至ってはなんの音沙汰も無かった。

悠子からメールが入っていた。

「ごめん、あの杉浦さん、東京に住んでる私のオジ様なの。ホントは松浦剛三。面白いことをするからって。私、内容は知らなかった。克彦をターゲットにしたつもりが、こんな騒ぎになるなんて。克彦にホントのこと言おうかどうしようか迷ったけど今言っちゃった。怒らないでね」悠子

完